いろどロード

みんなでつくる
みんなのロード

これまでのミュージアムロードは
まだ語られていない物語を抱えたまま
街に寄り添っていた。

そこにひとつ、布がかかる。

子どもの落書きが
ひらりと揺れる。
人々が関わるほどに
表情を変え、育っていく。

布を掛ける
ガーランドを吊るす
ハンモックを張る

布が揺れ、色が生まれ、声が交わる。
道はいつの間にか、歩くミュージアムへ。

ハンモックで休んでみたり

王子動物園前のわくわく

いろどロードのつくり方

子どもたちが絵を描き、大人たちが布を結び、時間とともに布は増え、
重なり、道は少しずつ、彩られていく。

通るたびに色が変わり、物語が重なり、ミュージアムロードは完成するのではなく、
時間と共に姿を変えながら、編み重ねられていく。
アートが生まれ、重なり、残り続ける場所へ。
帆布に描かれるひとつひとつの彩りがやがて未来の神戸の風景となり、
この道そのものをつくっていく。

ざいりょう

ミュージアムロードを彩るために用いる「布」は、
単なる装飾ではない。
港が街のすぐそばにある神戸だからこそ、
船を支えてきた帆布を用い、海の気配を道の風景
として立ち上げる。
廃棄されたり、端材として残されたりしてきたで
あろう**帆布を道にひらく素材として再び街へ戻す**。

いろどロードの
たのしみ方

みあげる。 ― 光と影が描くミチ

ガーランドとして宙に張られた帆布は、
太陽やライトの光を透かし、色とりどりの影を道に落とす。
時間や天候によって影は揺らぎ、
同じ場所でも、毎日ちがう風景が現れる。

帆布は、ミュージアムロード全体を
ひとつの大きな展示空間へと変えていく。
人は自然と足を止め、空を見上げ、
頭上に広がるアートを体験する。

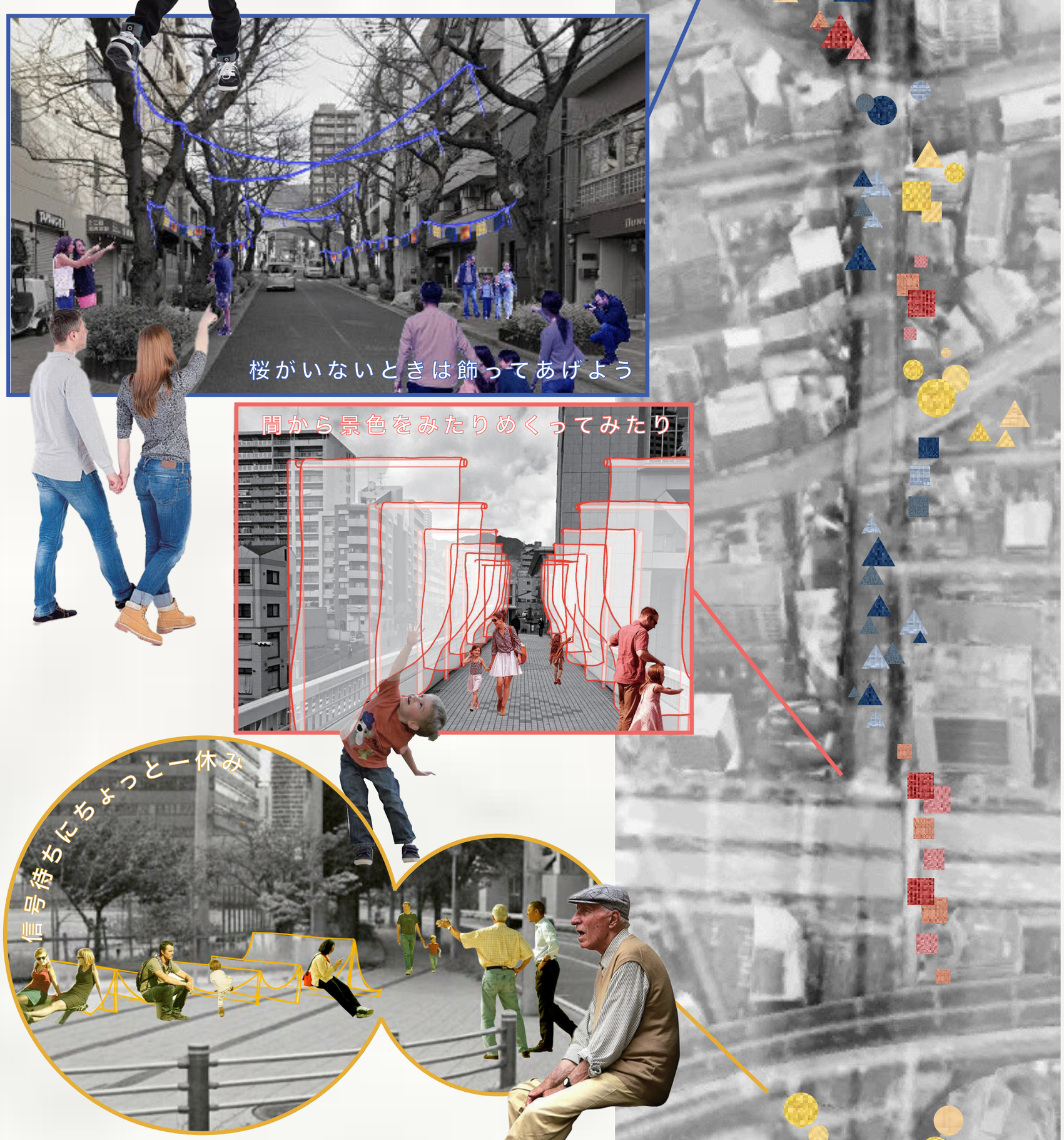
あそぶ。 ― 変化し続けるアート

触る、描く、結ぶ。
決められた使い方を持たない。
人々の美術体験そのものが、風景をつくっていく。

描かれた布はどんどん増え、色を変え、編み重なり、
道の表情は少しずつ変化し続ける。

くつろぐ。 ― からだで感じるアート

イスやハンモックとして使われる帆布は、
人の重さを受けとめながら、かたちを変えていく。
そのやわらかな感触は、通り過ぎるだけだった道に、
「立ち止まり、滞在する理由」を与える。
帆布に施された色や模様は、
座る人のすぐそばにあり、触れられるアートとなる。
鑑賞するのではなく、身体で関わるアートとして、
ミュージアムロードの日常に溶け込んでいく。



いろどロードのいろいろ

いろどロードのはじまり

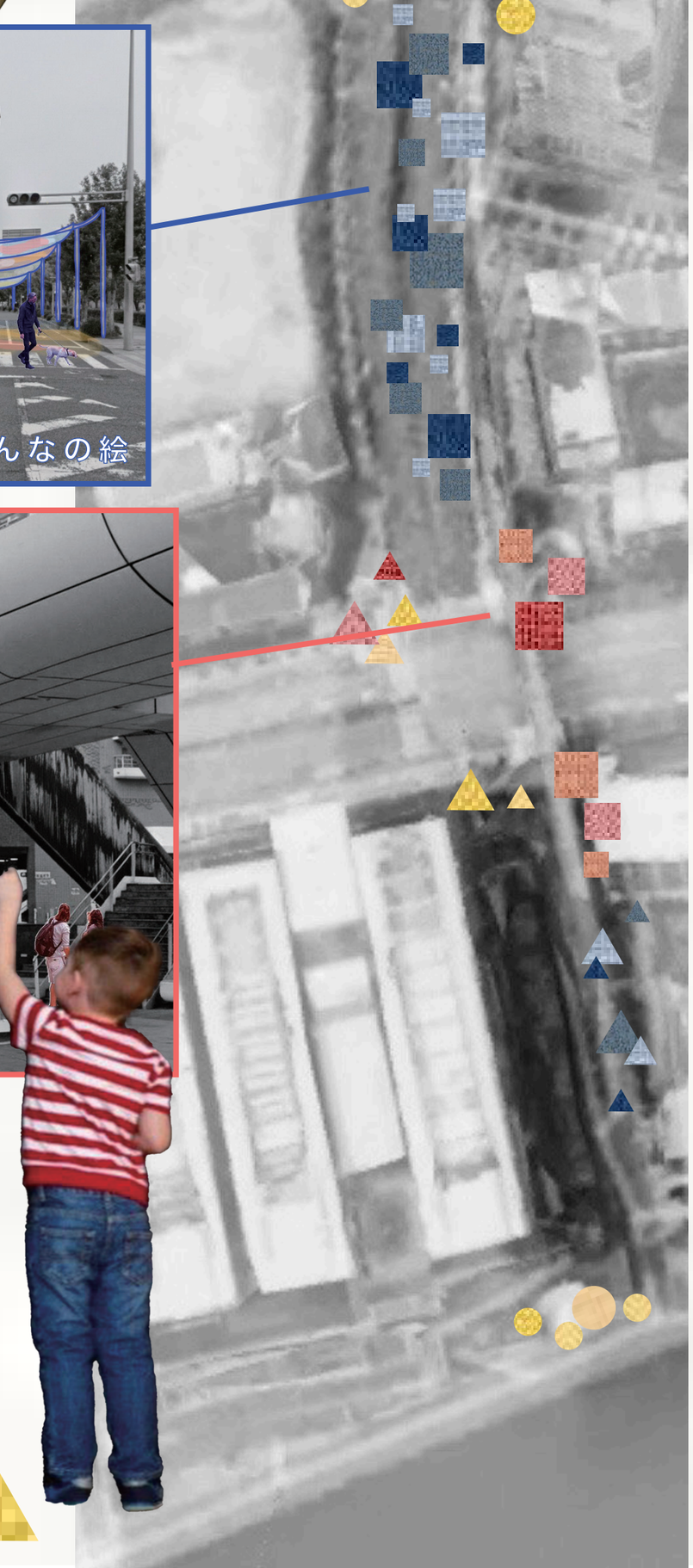
子どもたちが帆布に絵を描く。
その布は実際に道に張られ、ルーフやガーランドとして使われる。
自分の描いた色が、光を受け、影となり、
道の風景の一部になる。

いろどロードでのであい

若手アーティストとのコラボレーションによって、
帆布は新しい表現の場になる。
描く、染める、縫う、重ねる。
通りを歩く人々に、アートと人の出会いをもたらす。

いろどロードのうつろい

クリスマスの光、秋の色、夏の日差し。
季節ごとに帆布を入れ替え、
ミュージアムロードの表情が移り変わる。
「今はどんな布が張られているだろう」
そんな小さな期待が、人を何度も道へと呼び戻す。



一〇年後、二〇年後、、

誰かが描いた一枚の布に
別の誰かの色が重なり
布は増え
彩られた道には、
今日よりも
少し多くの人が集まっている。

町に暮らす人の手も
旅人たちの手も
そのひとつひとつがパーツとなり
ミュージアムロードは、
彩られていく。

完成はない。
人が集まることで
この道は新しい表情を
まとい続ける。
それがみんなでつくる、
いろどろーどの未来。